

とその過程などは当然熟知しなければならない。

要約すると、今後の地方予報技術者は今までと若干異なった予報法の開発、大規模現象の解析というよりも時間的・空間的に小さなスケールの現象の解析と予報がその役割となる。もちろん両現象は密接な関係があるので、前者を全く無視してよいというわけではない。

システムの面から考えると、第1種補正は大部分 machine で行なえる分野が多いが、第2種補正には man の活躍する分野が当面多く（山本鹿児島台長はこれを“すそ野”の問題と名付けている）、これが man machine mix system の例でもある。外国の文献その他によっても知れるように、NWW 構想は決して monkey machine mix にしてしまっただけではない。筆者は、地方現場の技

術ポテンシャルを信じているので日本ではそのようにならないことを確信している。

#### 6. 地方予報技術者の将来のイメージ

一言でいえば“man machine mix system”の“man”（総合判断主体）であることがその未来像である。このためには、大規模大気構造はもちろんのこと、小スケールについてもこれと同程度あるいはそれ以上の知識が必要である。言い換えると、地方予報技術者は今まで以上にニーズに応じた情報を適時適格に出すべき知識と経験が必要である。これに予報解説や防災業務という仕事加わるのであるから、ますます忙しくいっそう頭を使うことになるはずである。少なくとも man である限りは……。

## 研究調査への アツク

### 研究法雑感

沢田 竜 吉\*

昔聞いた講義の中に気象学研究法という2単位半年間の科目があった。内容の大部分は右から左へと耳を通り過ぎただけであったが、中には何故か不思議な共感を呼んだものもあった。

その一つは、研究を成功させるためには問題をできる限り細かく分けなさいということであった。一つの問題と思われるものでも、実はいくつもの問題を組み合わせたものであることが多い。物理実験のように条件をコントロールできない気象現象の研究では、このことがいっそう重みをもつのである。

もう一つは、研究が終わりに近づいて、いよいよ報告を書く時のことである。報告（または論文）は他人に読んでもらうものであるから、読む人の側に立って書きなさいというのである。報告書や論文の内容は大部分の人

には専門外の事であるので、せいぜいアブストラクトを読む位だろう。もしもアブストラクトに興味をそそられたら結論とか序論を読んでみようということになるかも知れない。要するに、最も多くの人が読み、ひょっとしたら結論やら本文の方まで読もうと思わせるかも知れない文章はアブストラクトなのであり、ついで結論、そして序論ということになる。これらを大切にしなければならぬことである。

なお論文の本文は、研究成果を伝える最も重要なものであるが、（アブストラクトの読者数に比べれば）ほんの少数の専門家にしか読まれないものなのだ。学会誌のように、専門を異にする多数の会員の会費で維持しているものに投稿するときは、できるだけページ数を少なくする努力が必要だろう。大多数の人には読まれない、役に立たないばかりでなく負担だけを押しつけることになるからだ。

\* R. Sawada, 九州大学理学部